

IR 専門委員会活動報告書の掲載にあたって

今日、大学は、教学の現状を的確に把握し、その充実を図る改革の姿勢が問われ、また、これを具体化することが強く求められています。本学は、教学改革を推進する PDCA サイクルの機能を強化することを目指し、2014 年度に IR 専門委員会を設置しました。円滑に教学改革を進めるため、本学の IR 専門委員会は、自己点検・評価委員会のもとに置かれ、委員は学部長、統計専門家の本学教員、全学共通教育部長等によって構成されています。また、2015 年度より IR 特任専門員を置き、本学の統計・分析機能をさらに強化してまいりました。

設置以来、IR 専門委員会では、教学データを中心に、教育のさらなる充実を図る改善策の立案に資する客観的な分析結果を提示する活動を続けてまいりました。本報告書は、学生アンケートの分析の一部をまとめたものであります。今後も IR 専門委員会の活動を通して、本学の教学の評価すべき点、改善すべき点を明らかにし、教学改革を支える取り組みを行っていきたいと考えております。

2015 年 7 月

自己点検・評価委員長

IR 専門委員長

下出 鉄男

IR 専門委員会活動報告書

自己点検・評価委員会（IR 専門委員会）

はじめに

本学では、毎年、2種類の学生による自己評価型アンケートを実施し、学修の成果について調査している。毎年4月のオリエンテーション時に、新2・3・4年次生を対象として行っている「2・3・4年次対象教育・学生生活に関するアンケート調査（以下、「2・3・4年次アンケート」）」と毎年12月から1月にかけて、4年次生を対象として行っている「4年次アンケート調査（以下、4年次アンケート）」である。IR専門委員会は、これらのアンケートの教務事項を中心に、集計と分析を行った。ここでは、その結果の一部を報告する。

2・3・4年次アンケート

「2・3・4年次アンケート」は、教育内容や学生生活について問うものである。この中で、大学での学修に不可欠な、基礎的な能力や技術（スタディスキル）が、どれだけ身についたかについても質問している。ここで取り上げたスタディスキルは、初年次のうちに身につけるべき基礎的な能力や技術であるため、2年次生と3年次生に限定して、回答を求めた。以下ではこのスタディスキルに注目し、2013年度から2015年度にわたって、学年ごとの集計結果を概観し、講評する。なお、具体的な質問項目の内容は、図表タイトルに示した。

・回収率

2013年度から2015年度の「2・3・4年次アンケート」の回収率を表1に示す。表1より、アンケートの回収率は、すべての年度、学年において8割以上と、非常に高い値であったことがわかる。

「2・3・4年次アンケート」は、毎年、新年度のオリエンテーションの際に、専攻ごとに配布・回収を行っている。各専攻が、責任をもってアンケートの実施に取り組んだことが、高い回収率につながっていると考えられる。

表1. 2・3・4年次アンケート回収率

2015年度		2014年度		2013年度	
2年次生	3年次生	2年次生	3年次生	2年次生	3年次生
89.1%	85.7%	88.8%	82.9%	86.0%	80.9%

・講評

「非常にそう思う」と「そう思う」を肯定的回答とすると、ノートをとる技術(図 1-1) およびディスカッションの作法(図 1-3)における肯定的回答は、いずれの年度においても、6~7割にとどまる。講義等において要点を聞き取りまとめること、演習等でディスカッションすることに不安を感じない学生が、毎年、3~4割いることを踏まえると、初年次教育の拡充を図るなどの対策を、早急に講ずる必要がある。

図 1-2 の口頭発表の技術については、すべての年度において、3年次生の肯定的回答の割合が、2年次生を上回っている。本学は、多くの専攻が2年次にも演習形式の科目を設置しており、これらの授業における鍛錬を通して、3年次生が2年次時点よりも、自分の考えを筋道立てて人前で話せるようになったと実感していると解釈できる。

関心の追求については、図 1-4 のとおり、いずれの年度も、7~8割が肯定的に回答していた。2013年度と2014年度に関しては、2年次生による肯定的回答の割合を、3年次生が上回った。ここから、学年の進行とともに自己の関心、テーマが明確になる様子が見てとれる。本学では、1・2年次のうちに、各分野の基礎的知識やスキルを身につけ、3・4年次にはより専門的な関心に沿った研究ができるよう、順次的なカリキュラムを編成している。図 1-4 は、順次的なカリキュラム編成が機能し効果をあげていることを裏付けている。全学共通カリキュラムを通じて教養を培いつつ、専門分野を系統的に学び、4年間の集大成として卒業研究を全学生に課していることも、図 1-4 に示す成果に結びついていると言えよう。

図 1-5 には、履修計画に関する結果を示した。すべての年度で、肯定的回答が8割を超えている。この結果は、4月のオリエンテーション時に行われるきめ細かな履修ガイダンスの成果であるとともに、学生が履修に臨んで「履修の手引き」等を十分に活用していることを示している。また、単位の実質化に向けたシラバスの充実により、学生の履修計画をサポートする環境が整えられていることもその一因に数えられる。

図 1-6 から図 1-9 に示したのは、情報の収集、情報の扱いに関する結果である。いずれの項目も、肯定的な回答が7割~8割5分を占め、こうした技術については、概ね身についたと考えられていることがわかる。本学では、必修の情報処理科目を1年次前期に設置し、教員が作成した統一のテキストを使用し、統一シラバスに基づいた授業運営を行っている。また、1年次には、図書館で行われる全学的な情報検索ガイダンスに参加することを義務付けている。さらに、様々な科目で、折に触れて著作権について指導している。こうした初年次教育の成果が、肯定的回答につながったと考えられる。

論理性の追求(図 1-10)と批判的思考力の追求(図 1-11)については、7~8割が肯定的な回答であった。「批判的・論理的思考力」の修得は、カリキュラム・ポリシーに掲げられており、その育成を意識した授業の運営が、上記の結果につながったと考えられる。具体的には、1・2年次に設置された各専攻の演習科目で、基礎的知識を修得させるだけでなく、発表や討論の手法を実践的に身につけさせている。アンケート結果は、これらの科目を通じて、論理性を意識する習慣や、批判的思考力が養われたことを示唆している。

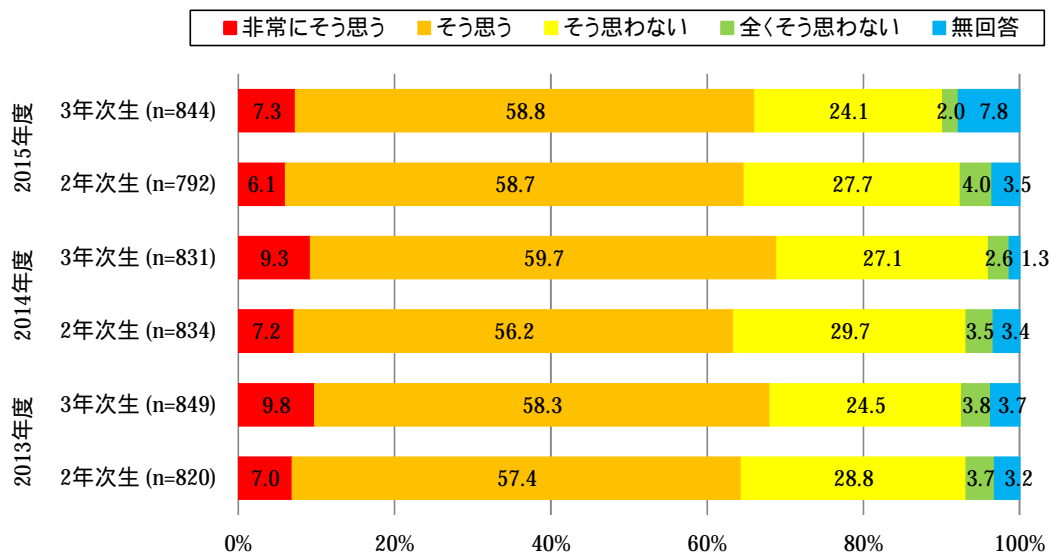


図1-1. ノートをとる技術

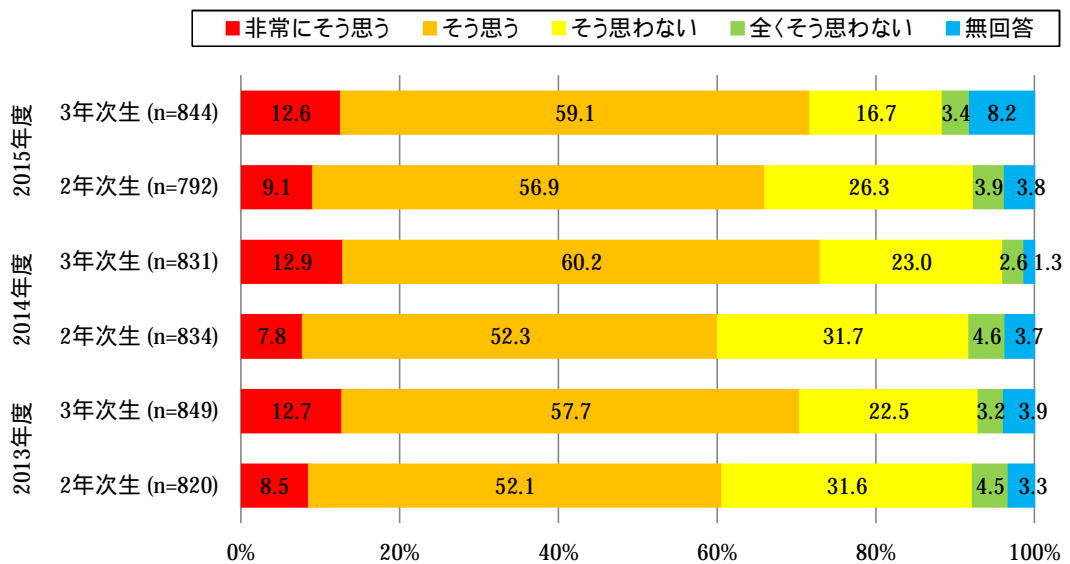


図1-2. 口頭発表の技術

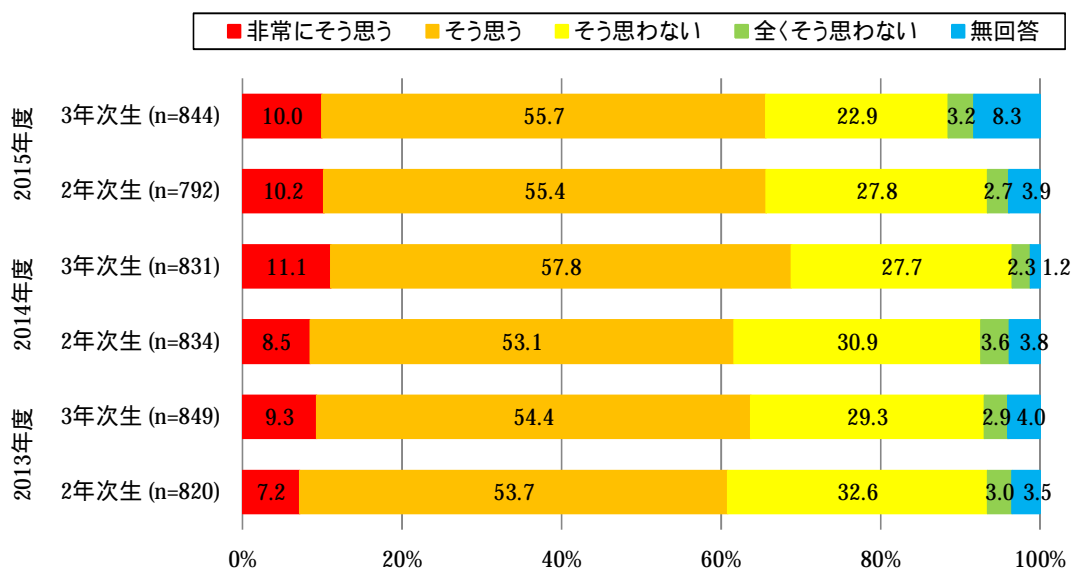


図1-3. ディスカッションの作法

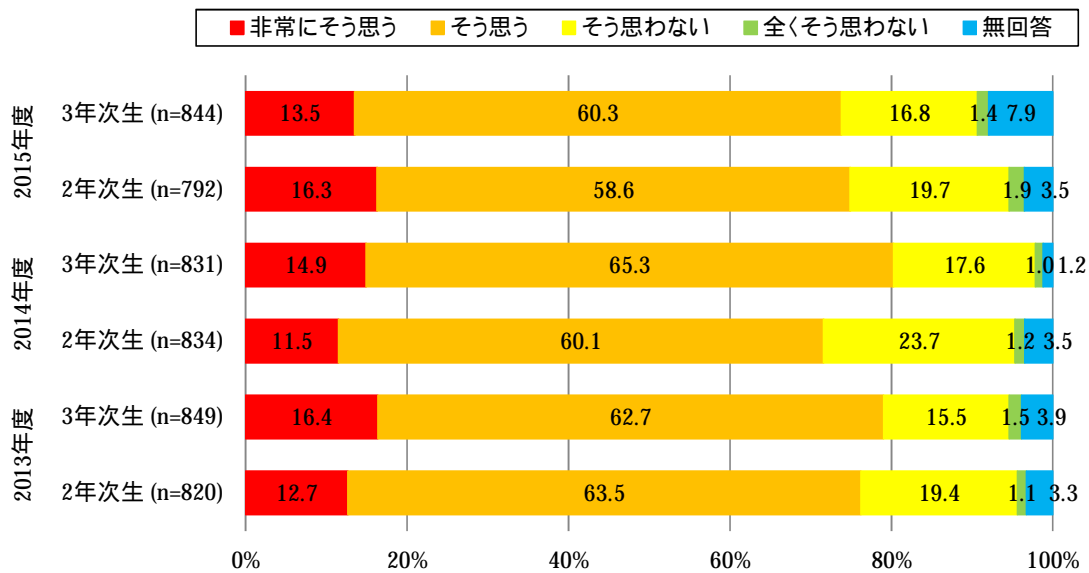


図1-4. 自分の関心を追求する

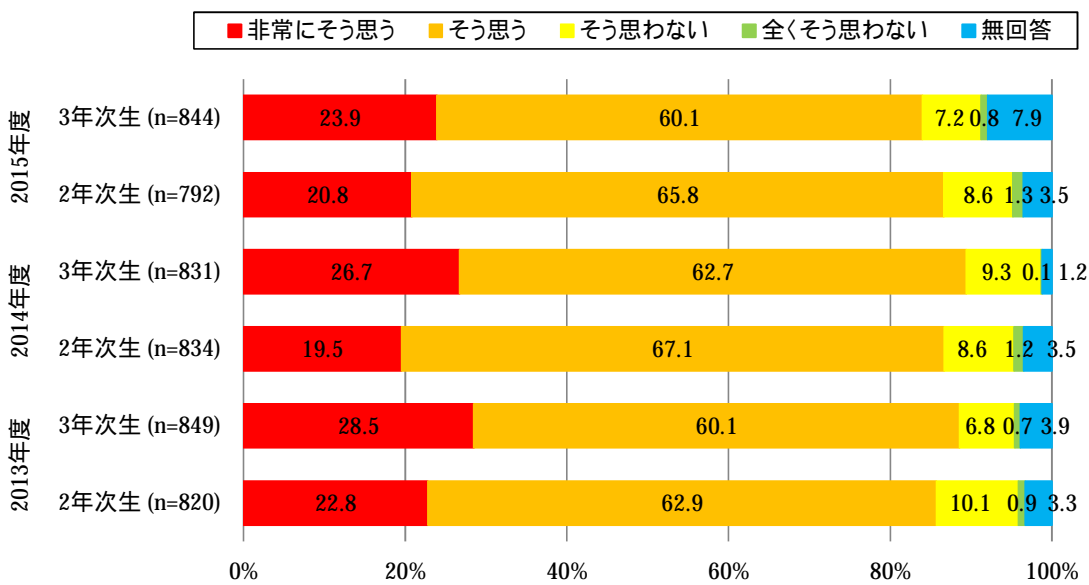


図1-5. 自分の履修計画をたてる

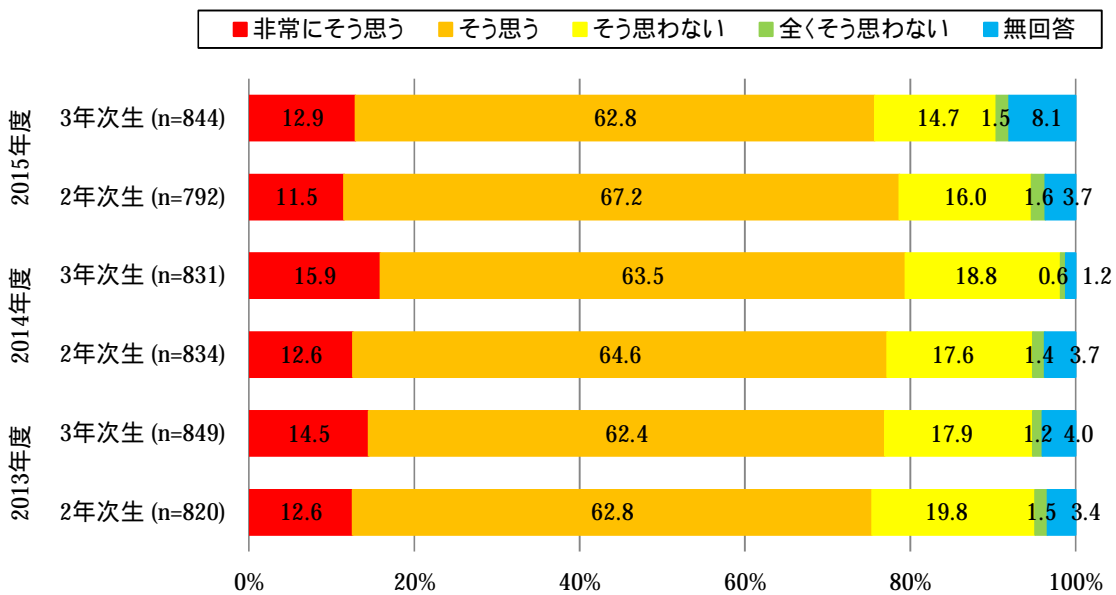


図1-6. 情報リテラシー、資料収集の技術

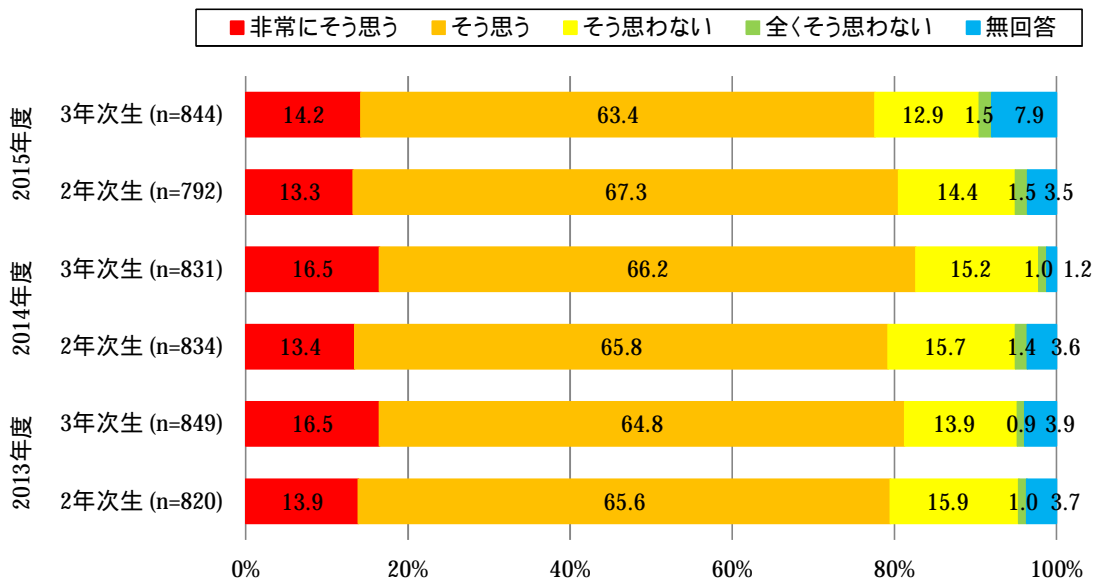


図1-7. 資料収集におけるコンピュータの活用

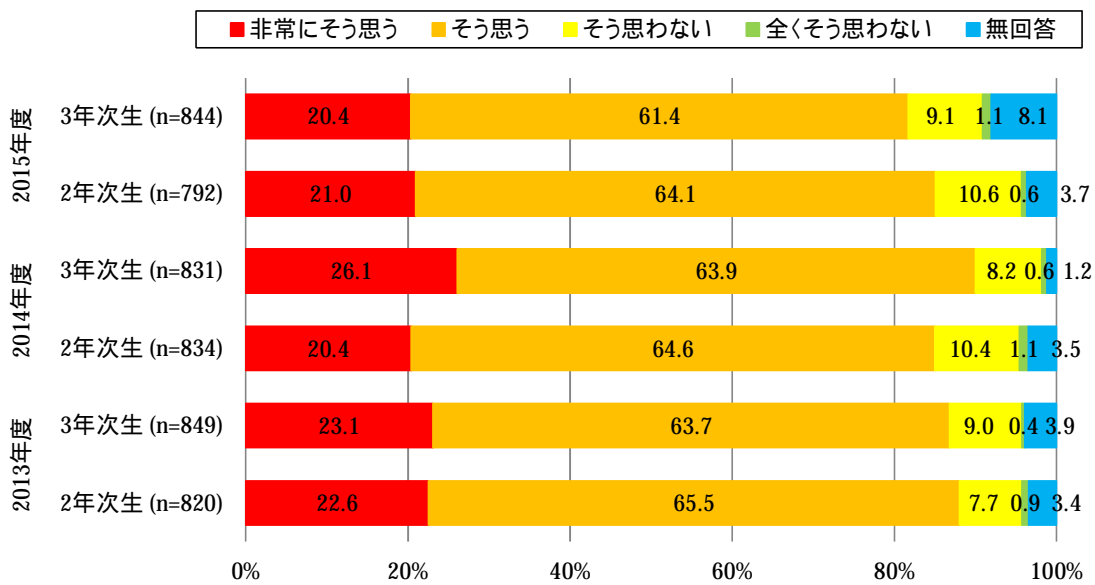


図1-8. レポート作成におけるコンピュータの活用

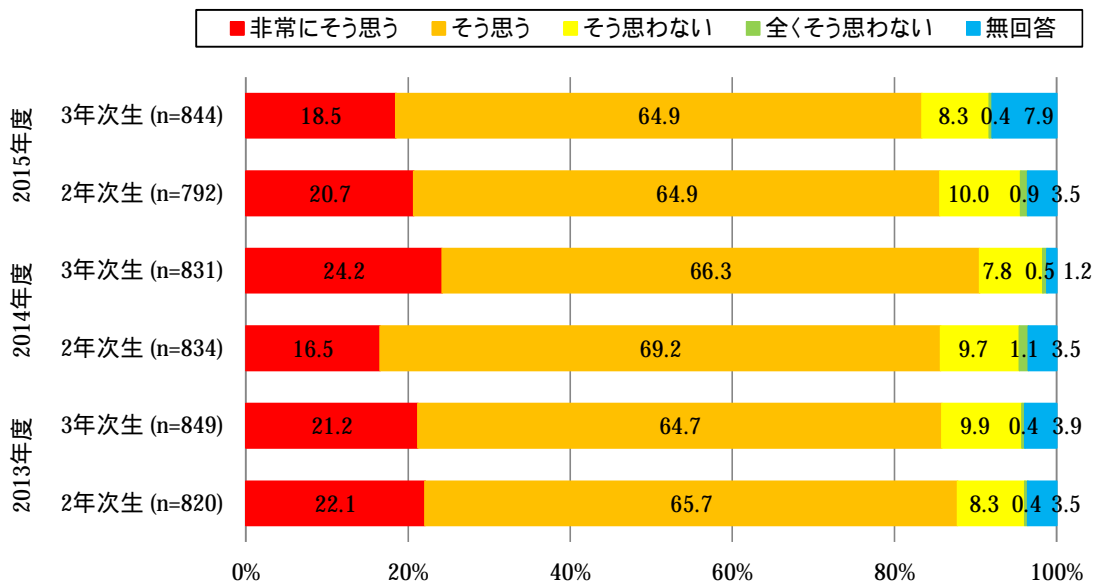


図1-9. 他人の著作権を尊重する作法

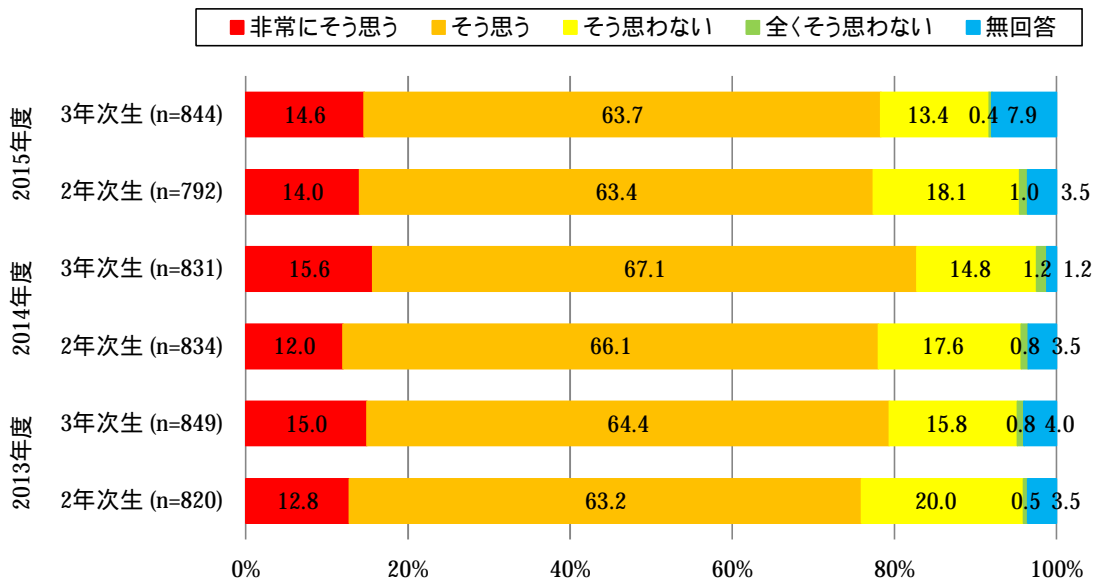


図1-10. 論理性の追求

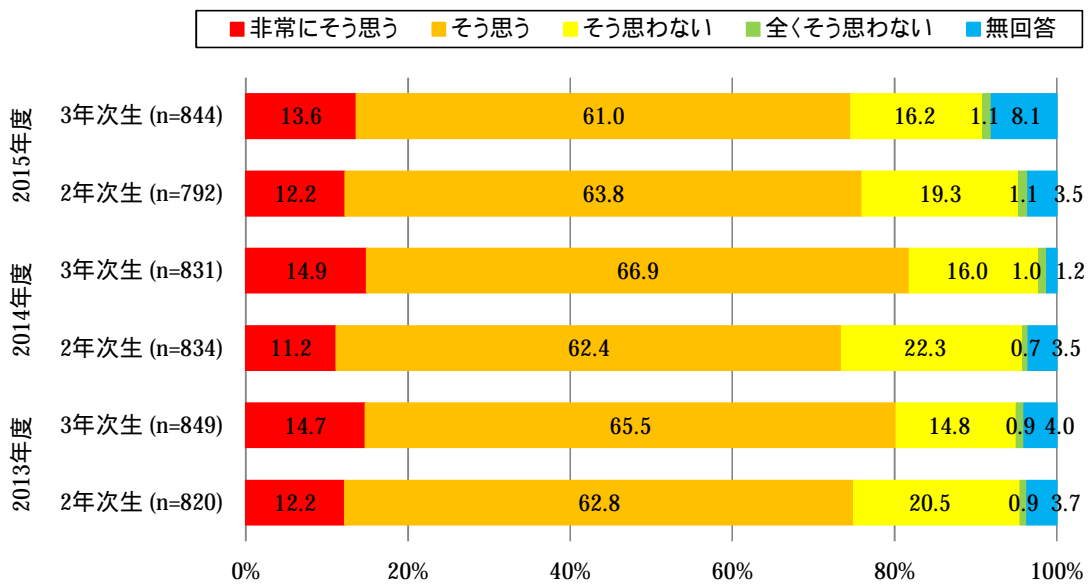


図1-11. 批判的思考力の追求

4 年次アンケート

「4 年次アンケート」は、4 年次生を対象とし、教育改善に活かす目的で実施している。この中では、在学中に、「スキル」、「理解」、「能力」が、各々の程度身についたかについて質問した。ここでの質問項目は、平成 20 年の文部科学省中央教育審議会の答申（「学士課程教育の構築に向けて」）に示されている「各専攻分野を通じて培う「学士力」～学士課程共通の「学習成果」に関する参考指針～」を基に、本学の理念や教育目標に照らして作成したものである。

以下では、在学中に身についた「スキル」、「理解」、「能力」の各々について、2011 年度から 2014 年度の集計結果を概観し、講評することとする。なお、具体的な質問項目の内容は、図表タイトルに示す。

・回収率

2011 年度から 2014 年度の「4 年次アンケート」の回収率を表 2 に示す。表 2 より、アンケートの回収率は、過去 4 年間のすべての年度において、8 割を超えていた。

「4 年次アンケート」は、毎年、各専攻の協力を得て、実施している。各専攻において、卒業論文提出後の 4 年次演習の前後にアンケートを配布および回収するなど、工夫を凝らした結果、高い回収率が実現したものと考えらえる。

表2. 4年次アンケート回収率

2014年度	2013年度	2012年度	2011年度
86.6%	84.2%	80.4%	82.1%

・講評

スキルについて（5項目）

2・3・4 年次アンケートと同様に、「非常にそう思う」と「そう思う」を肯定的回答とすると、日本語のスキルについては、肯定的な回答が、毎年、7 割以上を占めていた（図 2-1）。4 年次生は、4 年間の学びの中で、レポートや卒業論文の執筆に取り組み、日本語の読み書きの鍛錬を積んできた実感があることが示唆された。

一方で、英語のスキルについては、すべての年度において肯定的な回答が半数程度であり（図 2-2）、英語以外の外国語のスキルについても、肯定的な回答は 4～5 割にとどまった（図 2-3）。英語およびその他の外国語の教育は、少人数できめ細かく行っているが、肯定的な回答の割合は、他の項目に比べてやや低めであった。本学では、2014 年度入学者より TOEFL ITP を入学時と 2 年次の 12 月に受験させることとした。こうした外部指標を導入することで、自分の英語力を客観的に把握させ、主体的な英語学修を促す効果が期待される。

効果的なプレゼンテーションを行うスキルについては、肯定的な回答の割合が、いずれ

の年度においても5~6割にとどまっていた(図2-4)。これは、授業等でプレゼンテーションを行う機会が十分ではないためであると考えられる。問題解決型の授業(PBL)の展開など、今後の授業運営について全学的な検討が必要である。

図2-5より、相手や場面に応じた適切なコミュニケーションスキルについては、いずれの年度においても、8割程度が肯定的な回答であることがわかる。本学では、カリキュラム・ポリシーにも、コミュニケーション能力を身につけることを掲げており、その成果が顕著に反映されていると推測される。

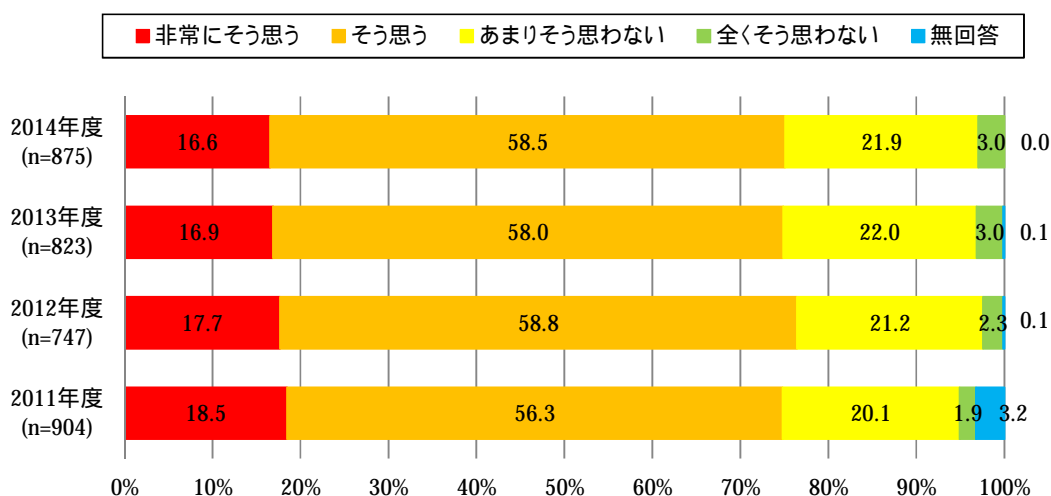


図2-1. 日本語のスキル(読む、書く、聞く、話す)

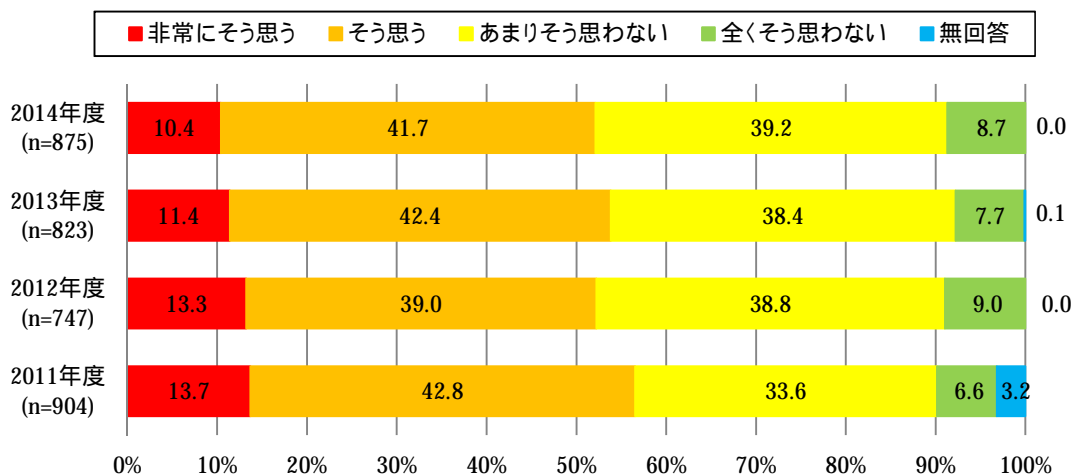


図2-2. 英語のスキル(読む、書く、聞く、話す)

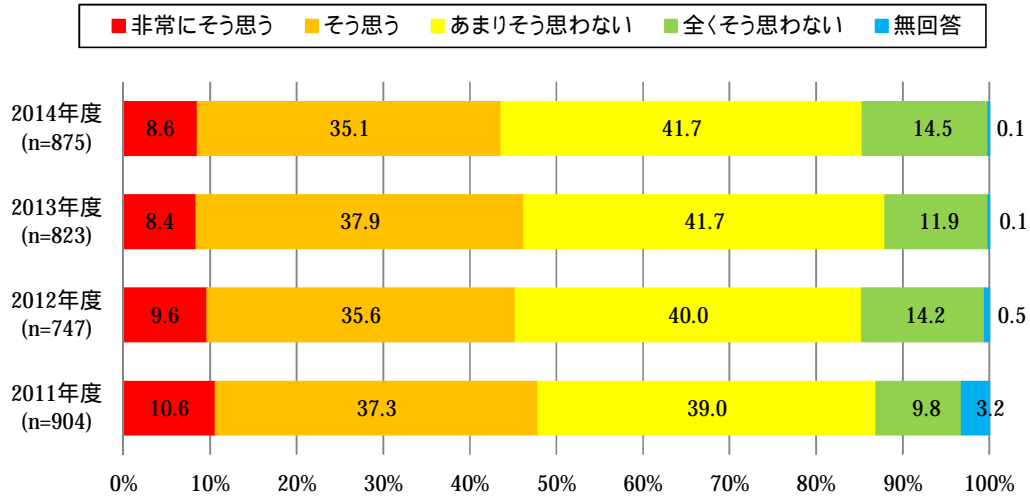


図2-3. 外国語（英語以外）のスキル（読む、書く、聞く、話す）

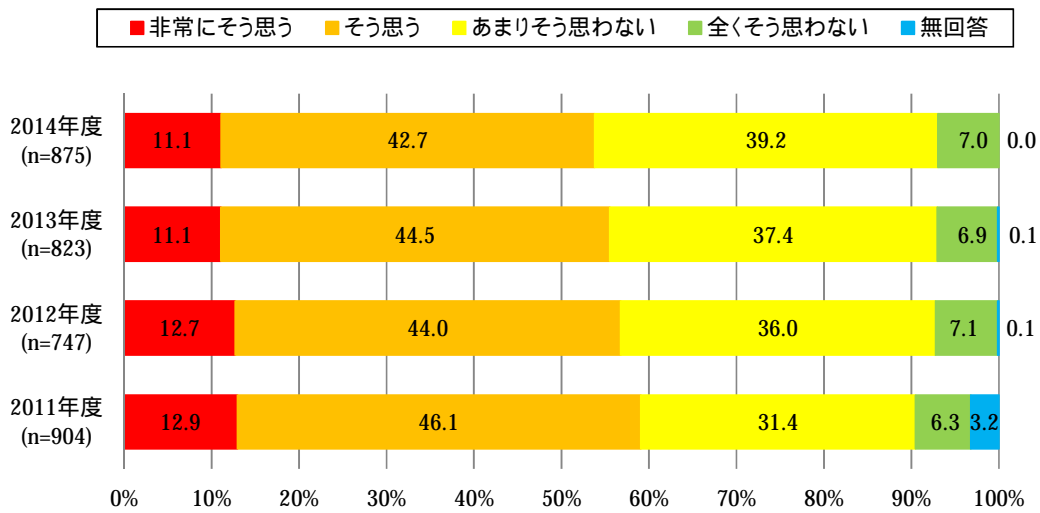


図2-4. 効果的なプレゼンテーションを行うスキル

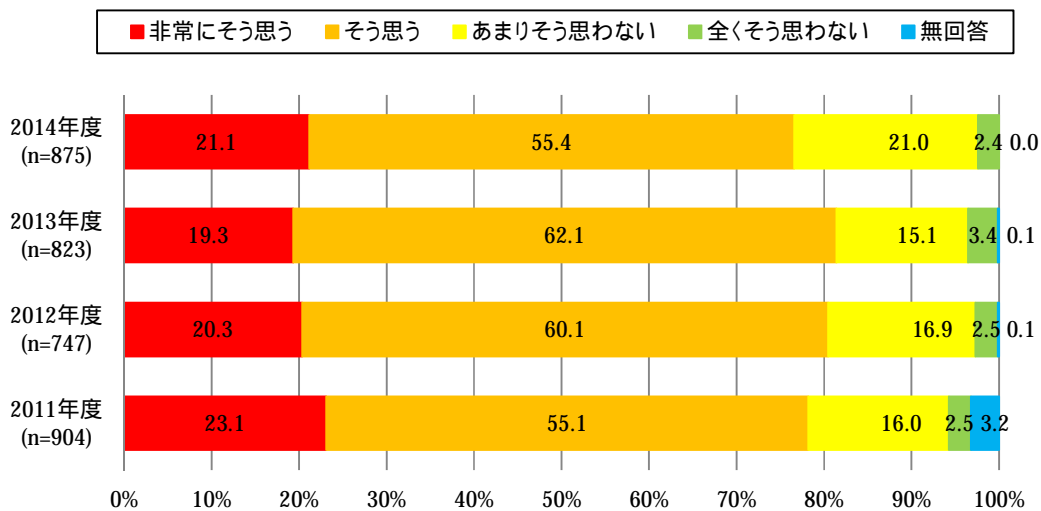


図2-5. 相手や場面に応じた適切なコミュニケーションスキル

理解について（9項目）

図 2-6 の日本の歴史と文化に対する理解と、図 2-9 の自然や環境問題に対する理解は、肯定的な回答が 4～6 割の間を推移していた。いずれも 2015 年度にはわずかに復調傾向が見られたものの、他の項目と比較すると肯定的な回答の割合は低く、これらのトピックに関する理解が十分でないことが示された。また図 2-10 の自己の身体に対する理解も、肯定的な回答が 5～6 割にとどまっていた。

一方で、多文化・異文化に対する理解（図 2-7）や、現代社会で生起する諸問題に対する理解（図 2-8）の項目では、すべての年度で肯定的な回答が 8 割近くを占めており、多くの 4 年次生がこうしたトピックについて理解を深めることができたと感じている結果となった。

本学のディプロマ・ポリシーでは、「全学共通カリキュラムの多面的履修を通して、基礎的な学習能力を養うとともに、人間・社会・自然に対する理解を深めるために専門領域を超えて問題を探求する姿勢を身につける」ことを掲げている。従って、図 2-6 の日本の歴史と文化に対する理解や、図 2-9 の自然や環境問題に対する理解等のように、理解が十分でないトピックに関しては、該当する授業科目の積極的な履修を促す等の対策が求められる。本学が標榜しているリベラル・アーツ教育の特色を活かして、文科系・理科系を問わず様々な科目を履修するよう働きかけることで、学際的な視点を培い、幅広いトピックの理解が実現できるものと考えられる。

キリスト教に対する理解（図 2-11）については、いずれの年度においても、肯定的な回答が 7 割を超えていた。本学は、キリスト教精神に基づく人格形成を教育の根本に置いている。よってこの結果は、学生がキリスト教の学習を通して、建学の精神であるキリスト教精神を深く理解し得たことを示していると考えられる。

図 2-12 に示したジェンダー問題に対する理解では、すべての年度で、肯定的な回答が 8 割程度となった。本学では、カリキュラム・ポリシーとして、「女性の自己確立とキャリア探求の基礎をつくるために、女性学・ジェンダー的視点に立つ教育を展開する」ことを掲げている。したがって、ジェンダー問題に関する肯定的な回答が多い理由として、独自性の高いカリキュラムが挙げられる。

自分の専攻分野に関する理解（図 2-13）の肯定的な回答は、いずれの年度においても、9 割を超えていた。また、自分の専攻分野に隣接する分野の理解（図 2-14）の肯定的な回答も同様に、8 割以上であった。これは、ディプロマ・ポリシーに掲げられている「学科・専攻における体系的学習と学科を横断する学際的学習とを通して、現代の多様な課題を発見、分析、解決する能力を身につける」という方針に合致する結果であり、本学の教育の成果が表れたものと解釈できる。

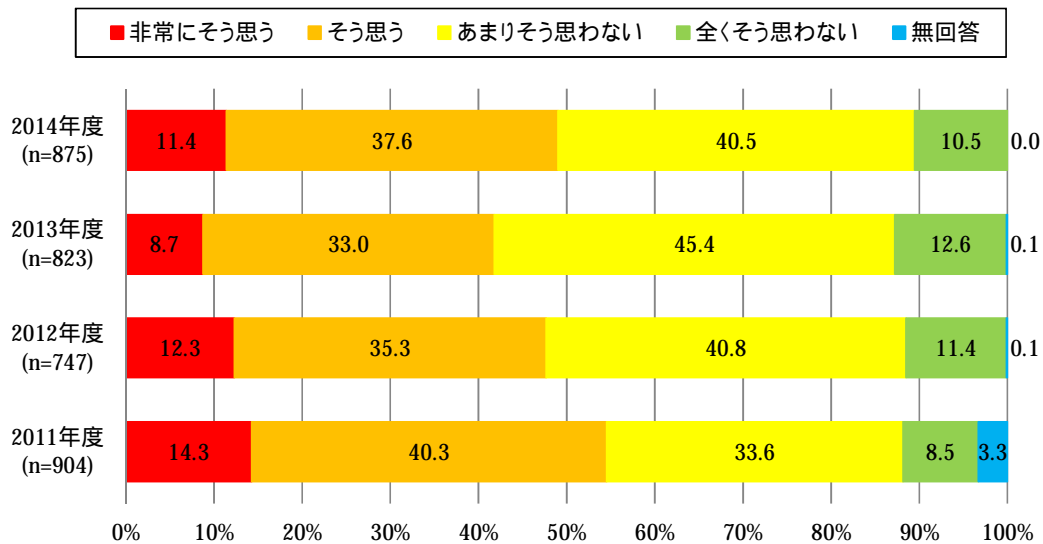


図2-6. 日本の歴史と文化に対する理解

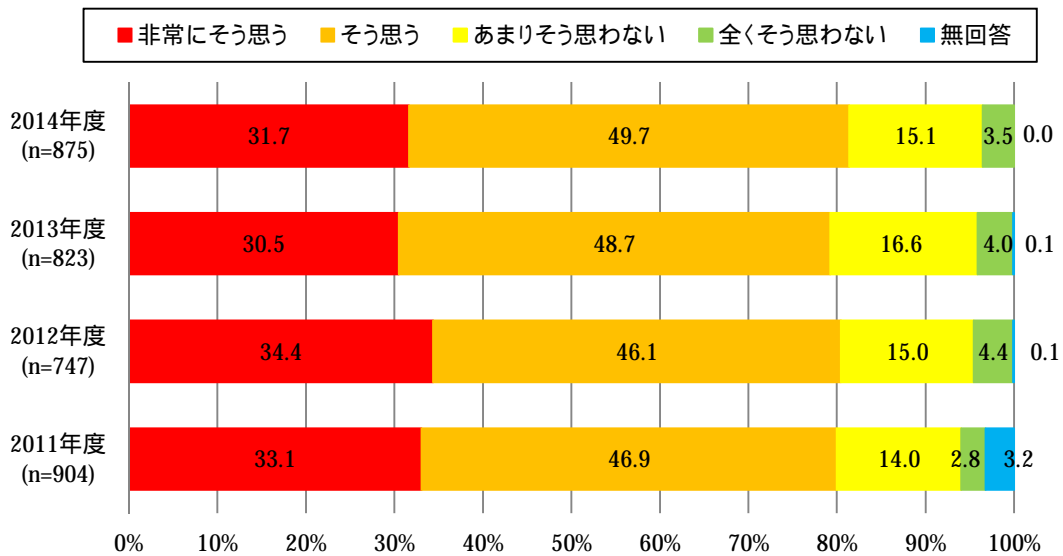


図2-7. 多文化・異文化に対する理解

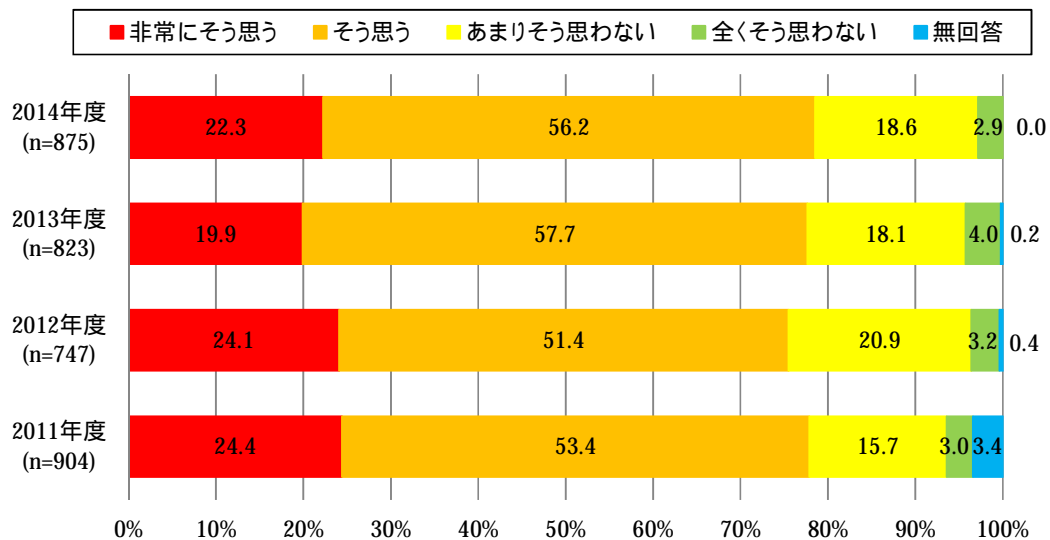


図2-8. 現代社会で生起する諸問題に対する理解

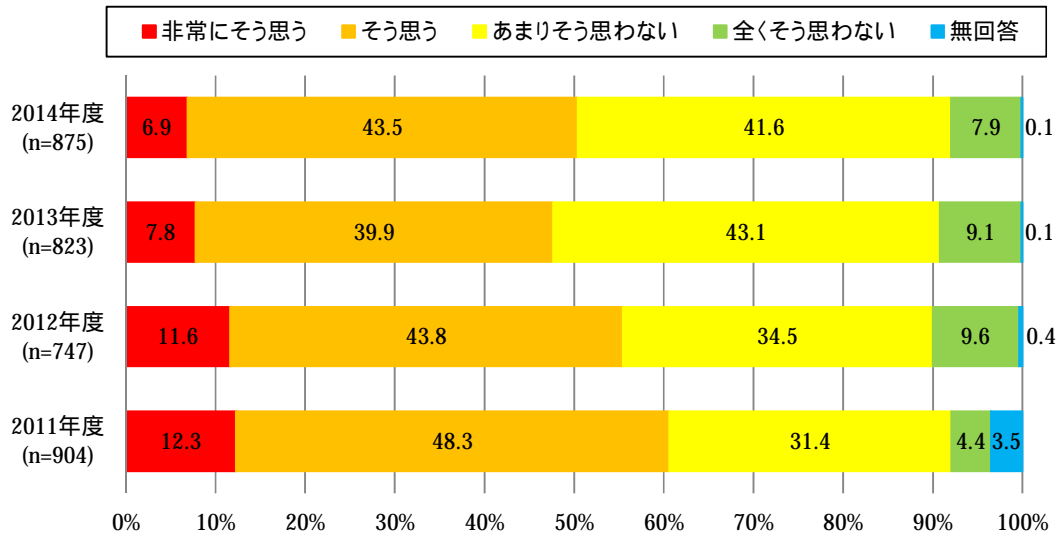


図2-9. 自然や環境問題に対する理解

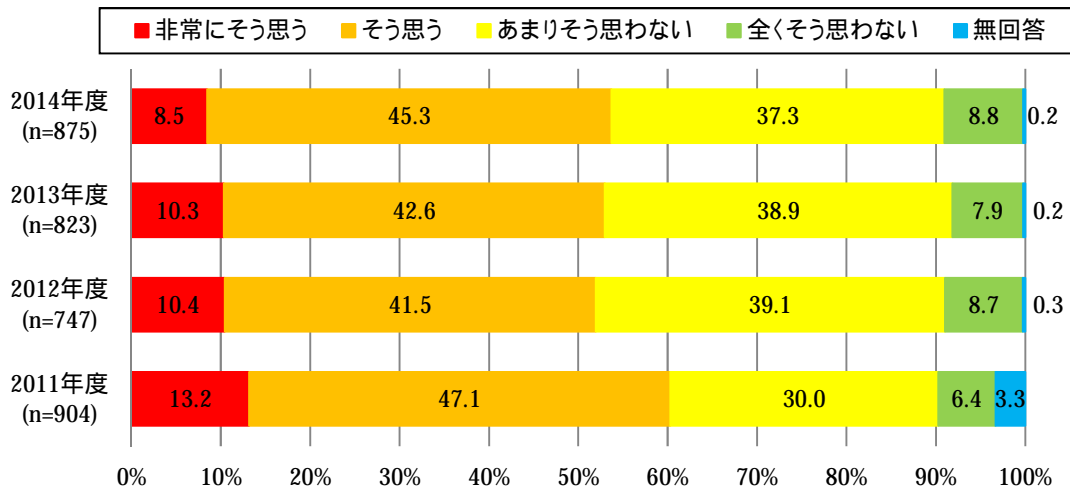


図2-10. 自己の身体に対する理解

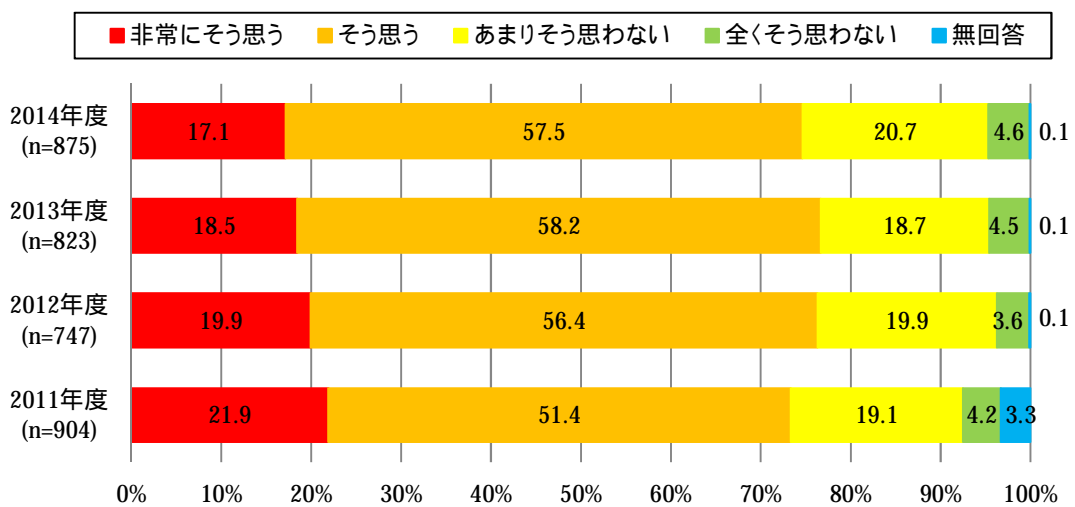


図2-11. キリスト教に対する理解

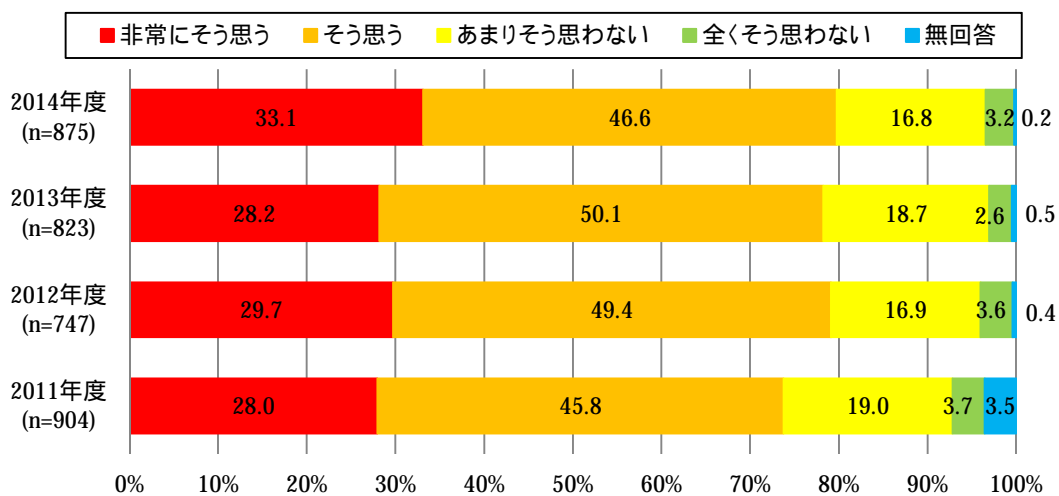


図2-12. ジェンダー問題に対する理解

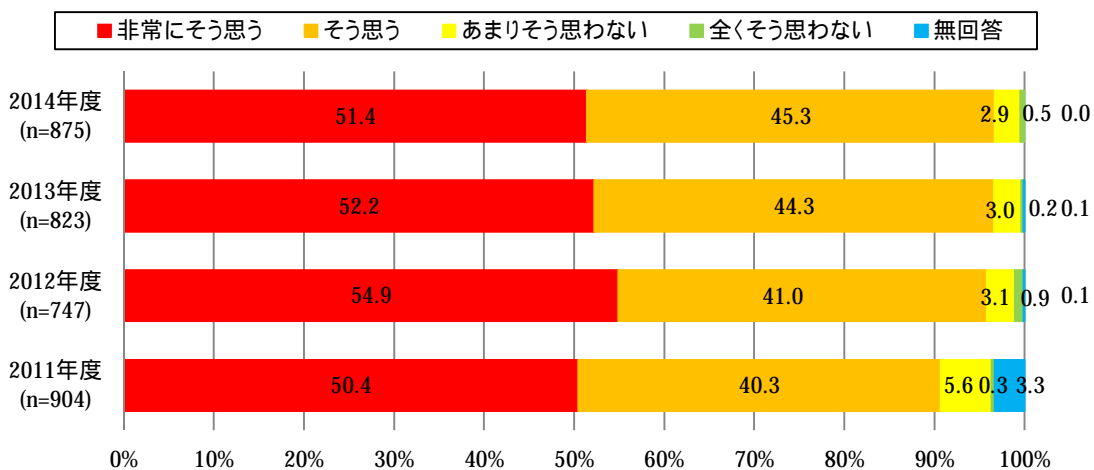


図2-13. 自分の専攻分野に関する理解

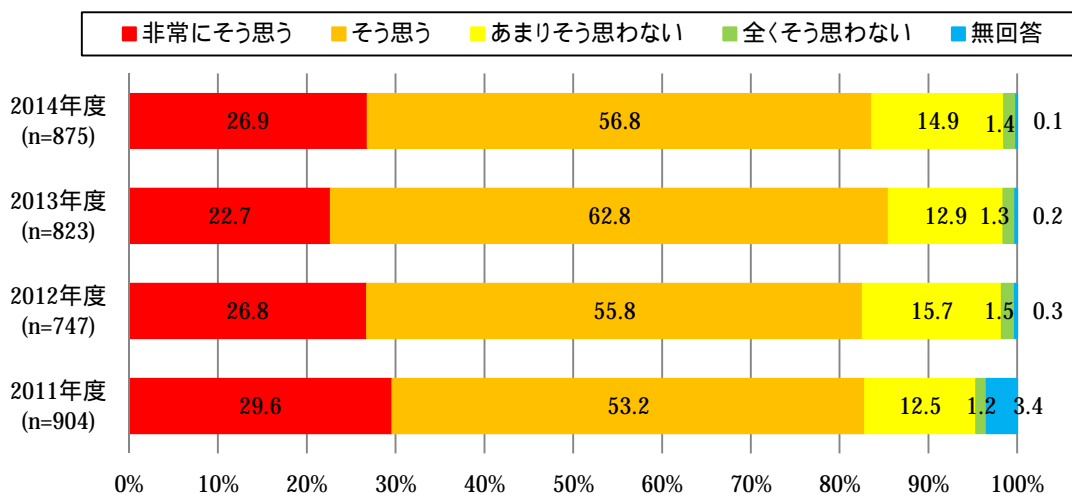


図2-14. 自分の専攻分野に隣接する分野の理解

能力について（13項目）

本学では、ディプロマ・ポリシーに、「4年間にわたる「講義」「演習」での学びや、卒業論文などの作成を通して、知識の活用能力、批判的・論理的思考力、課題探求力、問題解決力、表現能力、コミュニケーション能力などを総合する力を身につける」という方針を掲げている。これらの多様な能力に関わる項目の結果を、図 2-15 から図 2-22、および図 2-27 に示す。これらの図が示すとおり、いずれも肯定的な回答の割合が高く、多くの項目で、肯定的な回答が 8 割以上を占めた。ここから、ディプロマ・ポリシーで挙げられているような汎用的能力を伸ばすという意味でも、本学の学修は一定の成果を収めていることが読み取れる。

ただしこの中で、図 2-20 の「物事を数値やデータに基づいて実証的に検討できる能力」については、肯定的な回答の割合が 6 割前後にとどまっており、十分に能力が身についたとは言えない結果であった。本学ではリベラル・アーツ教育を掲げ、文理融合を意識した特色あるカリキュラムを編成している。その環境を存分に活かし、バランスよく文科系・理科系両方の視点や知識、能力を習得できるよう、文科系の学科に所属する学生にも、より積極的に理科系の授業科目を履修するよう指導する必要があると言えよう。

図 2-23 に示した高い倫理性と強い責任感については、いずれの年度においても、肯定的な回答が 7 割程度であった。高い倫理性や強い責任感は、まさに本学の基盤であるキリスト教精神によって育まれるものであるため、肯定的な回答の割合の高さは、キリスト教精神に根ざした教育の成果を示すと考えられる。

リーダーシップをとる能力（図 2-24）に関しては、肯定的な回答が 5 割を下回る年もあり、自己評価の低さが目立った。本学では、2014 年 12 月に制定したグランドビジョン「大学として育成する人物像」において、「知力（知識）を行動力にするリーディングウーマン」の育成を掲げている点からも、リーダーシップの強化は課題であると言える。リーダーシップをとる能力を伸ばすため、教育内容の工夫や改善を含め、早急に対策を考える必要がある。

他者と協調して行動できる能力（図 2-25）は、すべての年度で 9 割近くが肯定的な回答であった。本学では、多くの専攻で、1 年次から少人数の演習科目を履修することとなっており、コミュニケーションを密に取りながら学びを深める機会が、十分に活用されていることが示唆された。

図 2-26 の自発的に学習して継続していく能力は、いずれの年度においても、肯定的な回答が 7～8 割を占めた。肯定的な回答の割合は決して低くはないが、「教育内容・教育方法の改革に取り組み、主体的に学ぶことを学び、学び続ける姿勢を持った女性を育てる」という本学のグランドビジョンに即した人材を育成するためには、更なる教育改善が求められる。

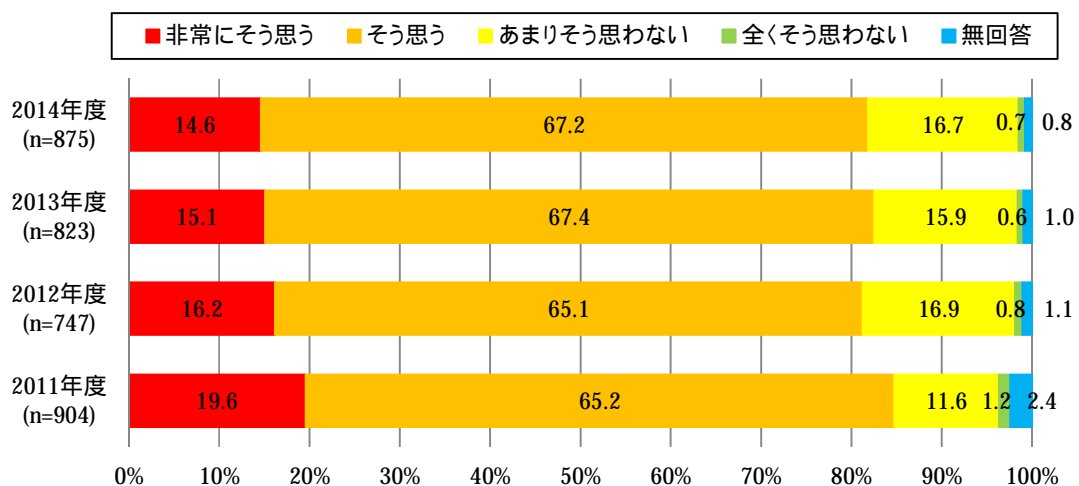


図2-15. 問題を見出し的確に把握する能力

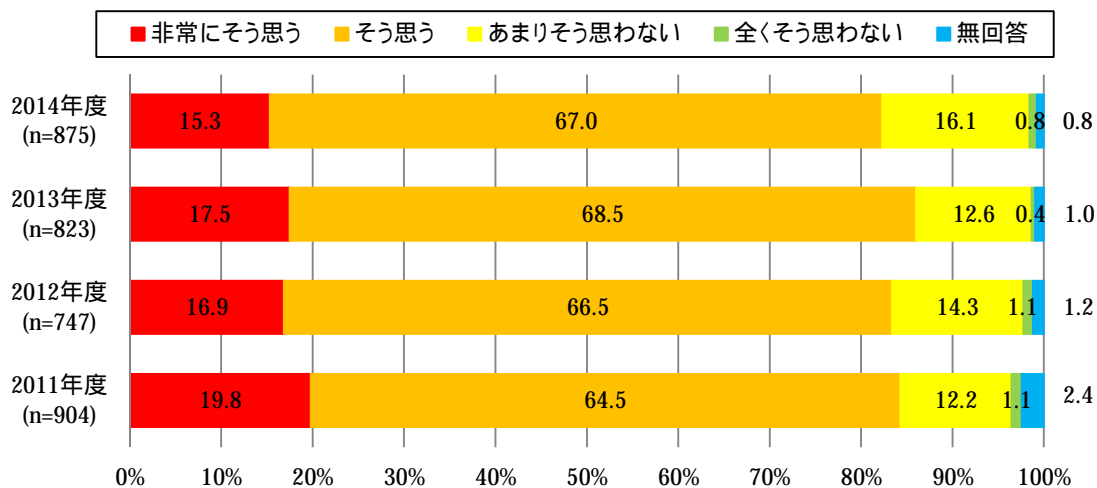


図2-16. 状況を的確に判断する能力

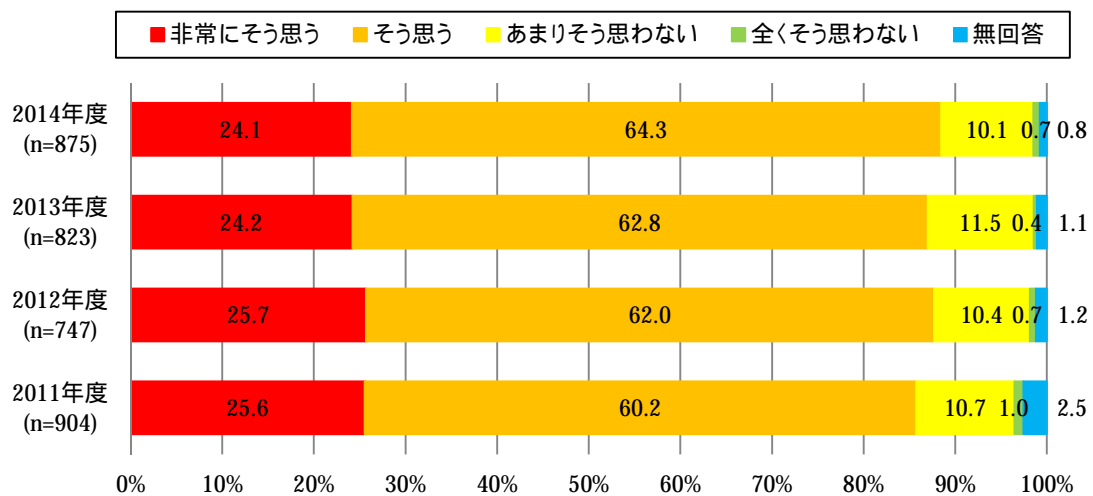


図2-17. 多様な情報を収集し、効果的に活用する能力

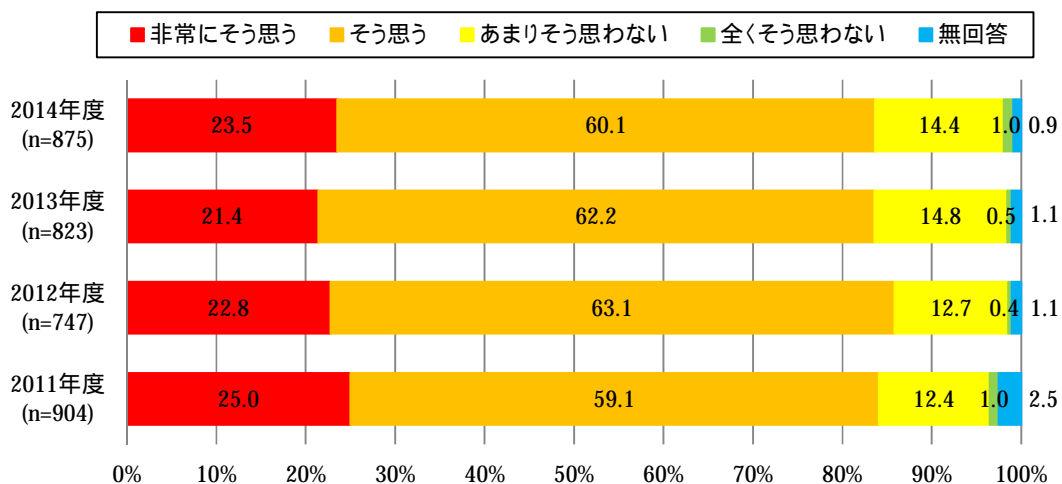


図2-18. 物事を偏りなく多角的に検討できる能力

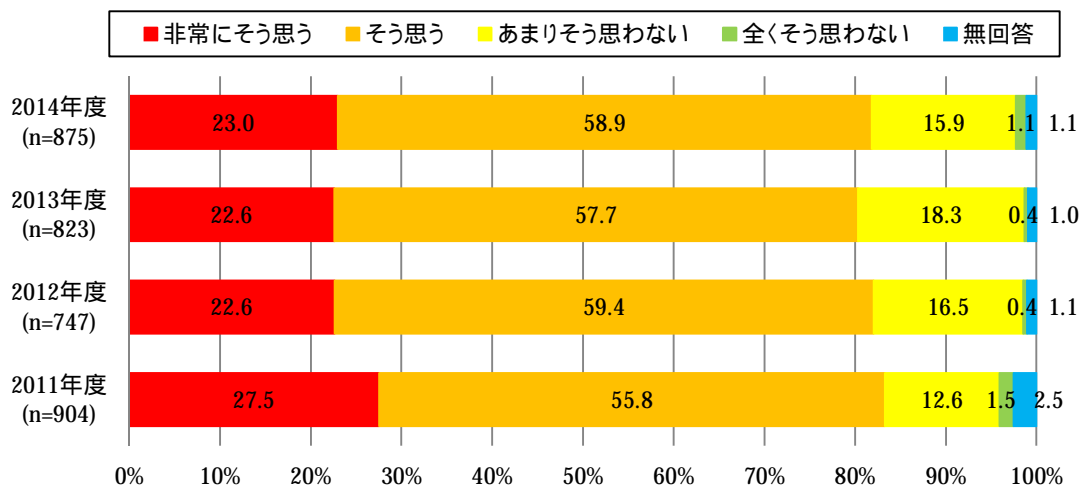


図2-19. 物事をうのみにせず、批判的に検討できる能力

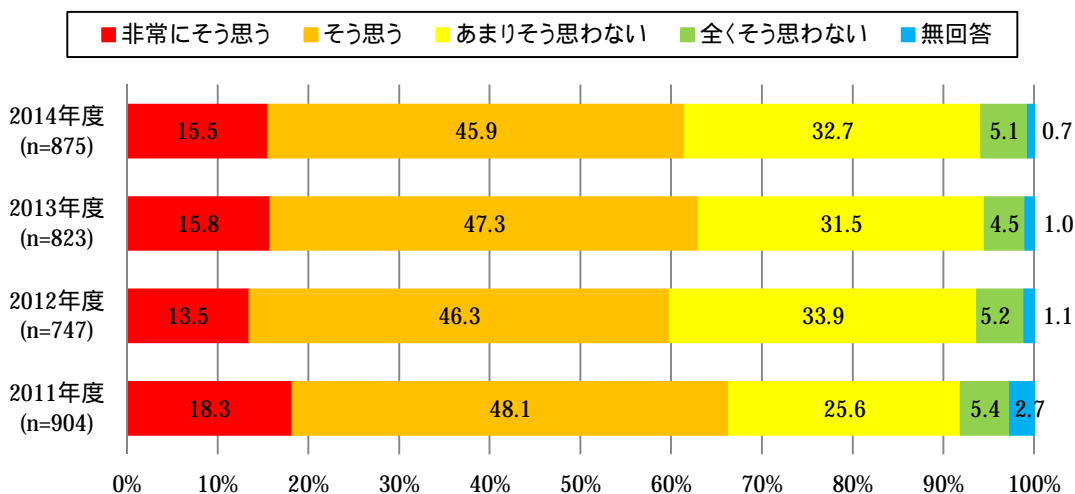


図2-20. 物事を数値やデータに基づいて実証的に検討できる能力

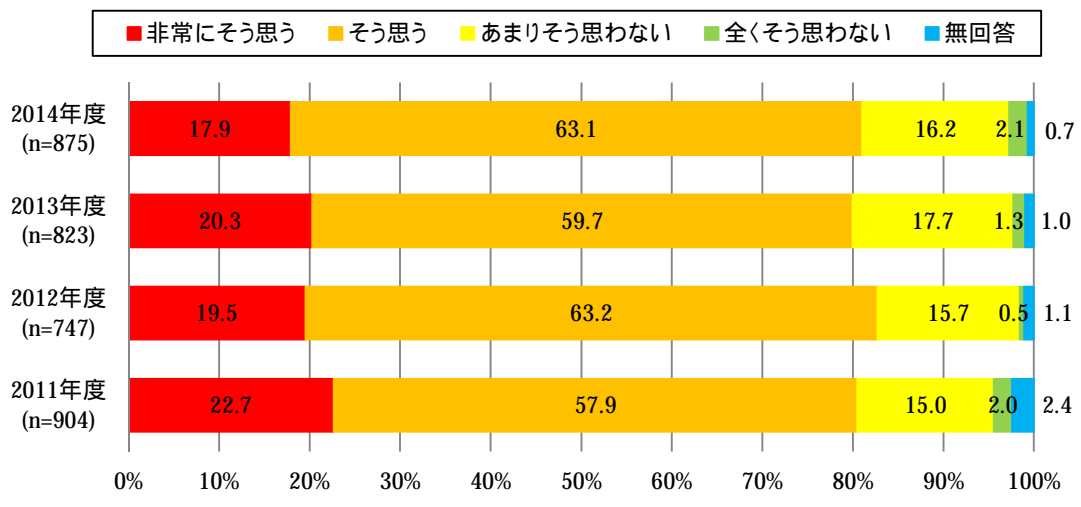


図2-21. 論理的に考える能力

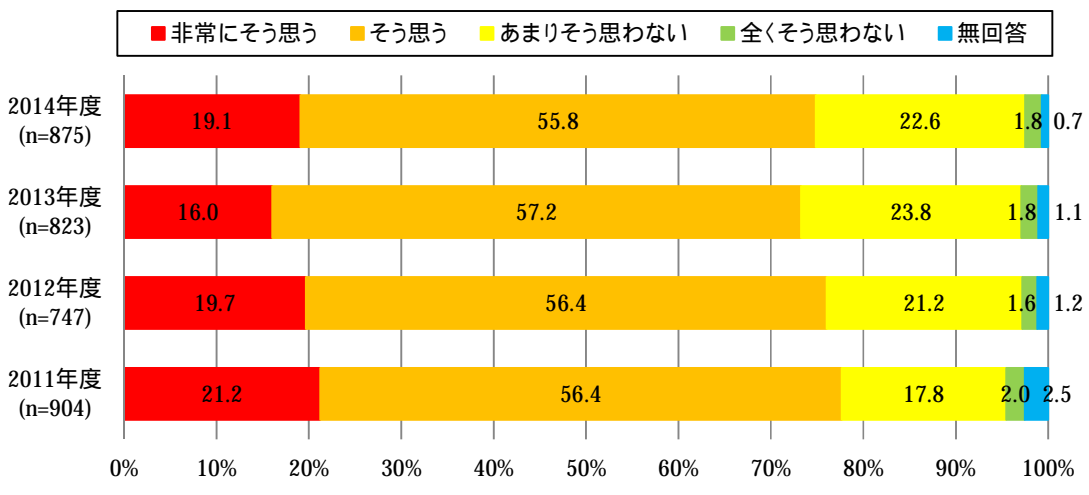


図2-22. 論理的な文章を書く能力

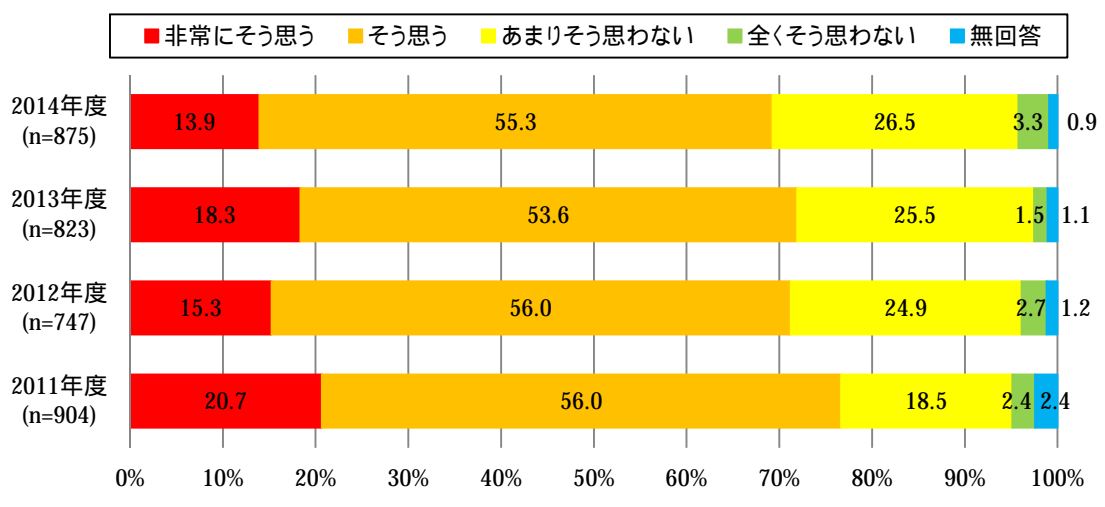


図2-23. 高い倫理性と強い責任感

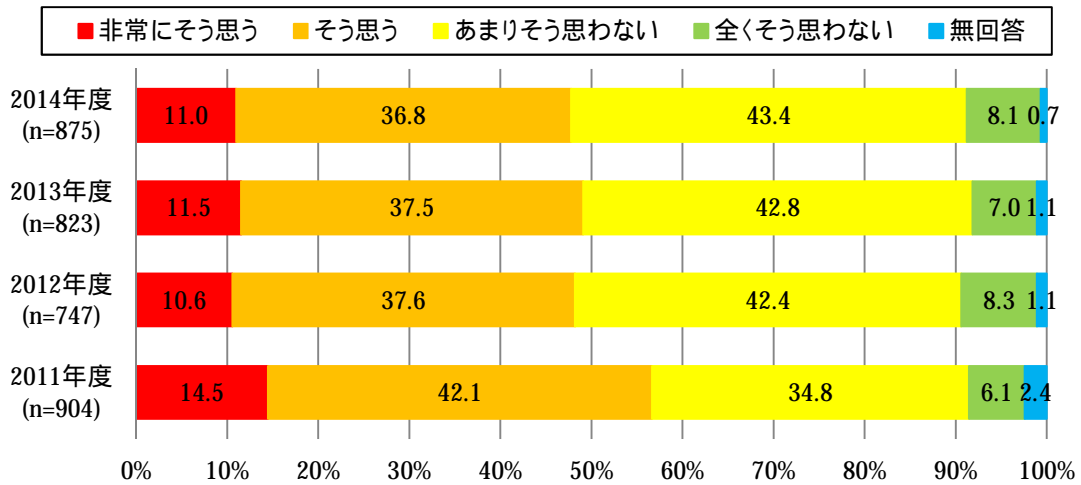


図2-24. リーダーシップをとる能力

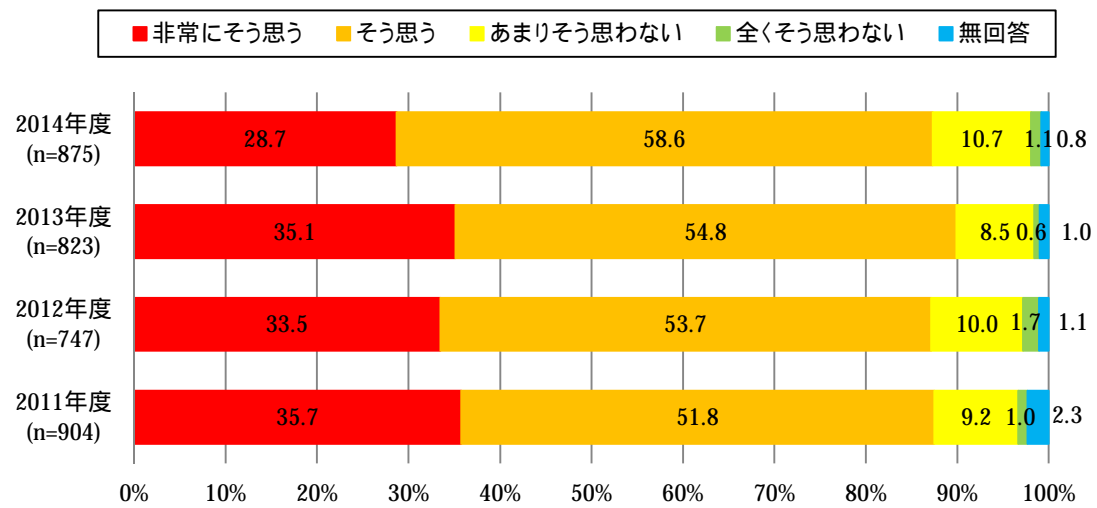


図2-25. 他者と協調して行動できる能力

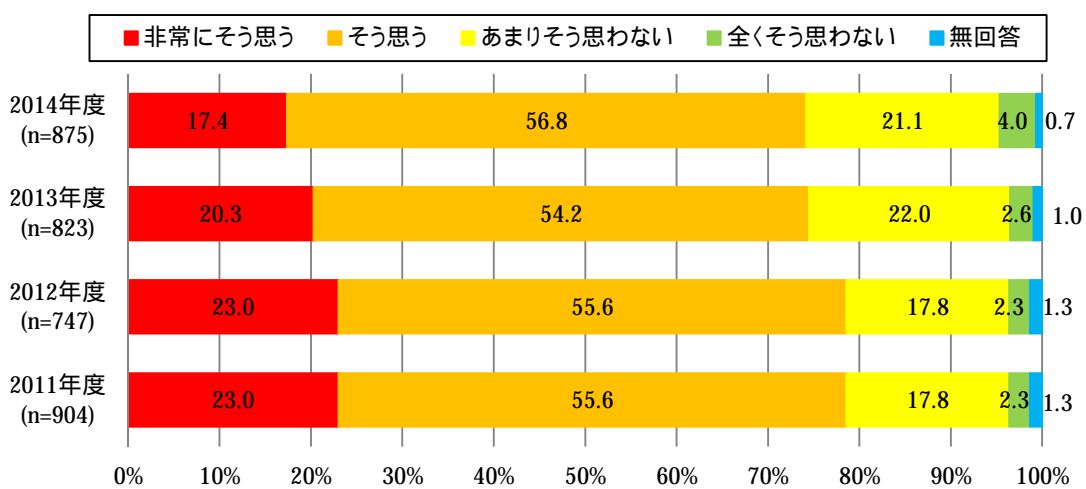


図2-26. 自発的に学習して継続していく能力

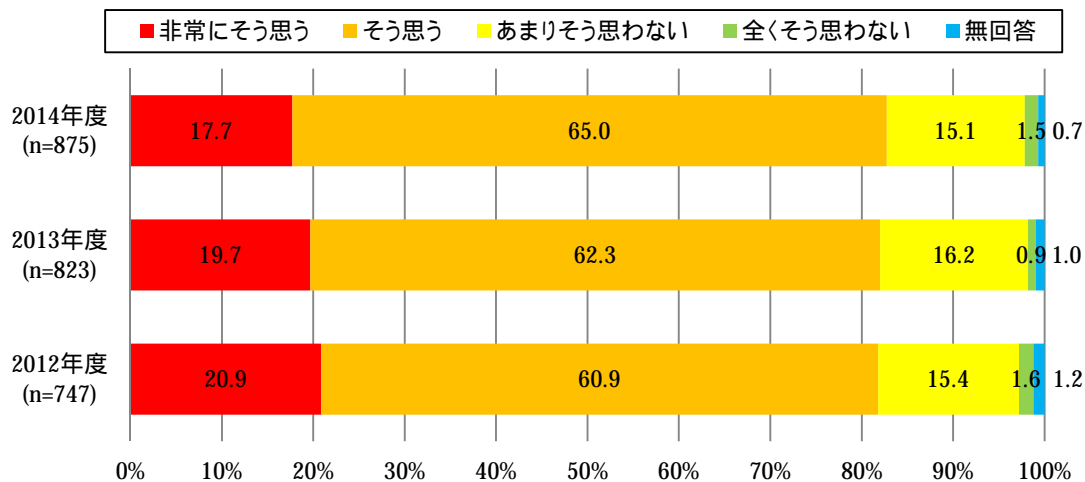


図2-27. 自分の考えをまとめてわかりやすく表現する能力

おわりに

本学は、「キリスト教を基盤としたリベラル・アーツ教育」を教育の根幹に据え、「専門性をもつ教養人」の育成を目指して、「全学共通カリキュラム」と「学科科目」を2つの柱とし、女性の自己確立、キャリア探究の基礎を築く教養教育を実践している。

今回まとめたアンケートの結果からは、こうした理念や方針に基づいた本学の教育が実を結んでいる部分と、更なる改善が必要な部分が浮き彫りとなった。

特に、コミュニケーション能力や協調性に関しては、本学の教育の成果が顕著に現れた。2年次生や3年次生は、相手や場面に応じた適切なコミュニケーションスキルが、4年次生は、他者と協調して行動できる能力が、本学の学びを通じて身についたと感じていることが示された。本学は、グランドビジョンで、「他者を尊重し協働できる女性の育成」を掲げているため、引き続き、こうしたコミュニケーション能力や協調性を育む教育を行っていききたい。

一方で、リーダーシップをとる能力については、身についた実感があまりないことが、4年次アンケートから明らかとなった。これについては、現状を真摯に受け止めるとともに、グランドビジョンにも掲げている「問題解決型教育の展開（PBLの導入）」を早急に行い、実践的な教育を通して、リーダーシップを発揮できる女性を育成することが急務である。

また、同じく4年次アンケートより、物事を数値やデータに基づいて実証的に検討できる能力も、十分に身についたとは考えられていないことが示された。グランドビジョンにもあるとおり、本学独自のリベラル・アーツ教育を一層推進し、文理融合型教育を積極的に展開するなど、教育内容の見直しを図り、こうした能力の育成に力を入れる必要がある。

ここにまとめたアンケートの結果は、本学の教育の理念や方針を改めて顧み、教育改善

の必要な部分を意識するため、教職員で共有し、今後の本学の教育研究の活性化につなげていきたい。また学生の皆さんには、「専門性をもつ教養人」として誇りを持って本学を卒業できるよう、アンケートの結果を学修の励みとしてもらいたい。